

森村・川村ゼミ前期グループ発表

「モダニティとモダニズム」

池戸 漠 佐藤 奈央 元島 瑞貴

2006年5月10日

1. はじめに

第一章はポストモダニズムの先駆けとなった『ソフト・シティ』という概念について言及しているが、ジョナサン・ラバンは、この『ソフト・シティ』とは、あまりにも入り組んだ場所で、けして秩序だったものではなく混沌としている場所である、としている。この「秩序だったものではなく、混沌としている」状態は、まさにポストモダニズム的であるために、『ソフト・シティ』を理解するためには、ポストモダニズムを理解する必要がある。そしてポストモダニズムを理解するためには、モダニズムを理解する必要があるように思う。なぜなら、ポストモダニズムが意味するものは、モダニズムに対する何らかのリアクション、あるいはモダニズムからの離脱を表している、ということ以外には、人々の間での一致した意見はないからである。そこで、ポストモダニズムの前提となるモダニズムの理解を深めていこうと思う。

2. モダニズムが目指したもの

・モダニティ＝統一的、普遍的、と一般的にはなっている

→しかし、「現代性とは、一時的なもの、うつろい易いもの、偶発的なもので、これが芸術の半分をなし、他の半分が、永遠のもの、不易なものである」(ボードレー『近代生活の画家』)

つまり、モダニティはあらゆる歴史的状況との断絶をはかる。それはモダニティ自身とも断絶することを意味する。

・永遠のもの、不易なものはあるのか？---①

啓蒙思想家達

→モダニティのプロジェクト(ハーバマス 1983,9)

→自己の内的な論理に従って、客観的科学、普遍的な倫理と法、自立的な芸術を発展させようとした

→しかし、20Cにおける2度の大戦やナチスに科学や思想は利用される結果となってしまった。

・アヴァンギャルド

マックス・ウェーバーやニーチェ

→「創造的破壊」と「破壊的創造」 by ニーチェ

「創造的破壊」⇨断片化、移ろいやすさ

「破壊的創造」⇨永遠性、不易なもの

「創造的破壊」はモダニズム的プロジェクト遂行の際のディレンマから派生

- ニーチェ以降「永遠のもの、不変なもの」を自動的に決定できなくなってしまった
- ・永遠のもの、不易なものはあるのか？---②
- 常に破壊し続けることが永遠を表現する唯一の方法
- なぜなら、美学は善悪を超える
- 時間とはかない性質とを凍結することによってのみ、永遠について表現した

3. 機械化とモダンデザイン

19世紀の政治・経済の変化、資本主義的近代化の波

生産・流通・消費の発達——機械化していく…芸術家たちも拒否・模倣・ユートピア的未来の想像
など様々な発想を持った。

- ・ベンヤミン…『アウラ芸術』『芸術のための芸術』を主張
「市場で2つとない1度だけの創造物に価値がある。」
- ・モリス………機械化に反発してアーツ・アンド・クラフト運動を起こす・職人文化の主張
「単純なデザイン、そしてあらゆるまがいものの廃物の一掃。」
- ・バウハウス…美学的には機械効率に基づく性質を持つような商品を大量生産する技術
として『技能』を再定義
「機械はわれわれのデザインの近代的な手段である。」

→モダニズムは機械的・合理的なデザインのイメージが強いが、当初はそれも一意見にすぎず、
多種多様な反応があった。

*「都市の芸術」

モダニズム運動全体は、インターナショナリズムと普遍主義の立場をとっているが、それぞれの都市・場所の特殊性は、多様なモダニズム的作品にはっきりと影を落としている。

(急速な都市成長や産業化・機械化、大規模な都市整備などの変化)

ゲオルグ・ジンメル『大都市と精神生活』

…都市の経験とモダニズム的思考および実践とのつながり

(モダニズムの性質は、相互に作用しあっているとはいえ、19世紀後半に立ちあらわれた巨大で
複数の言語が飛び交う多様な都市にまたがって変化してきた。)

都市で暮らす人々の生活は、個人の自由は得るが、他者を客観視し冷淡で血の通わない人間
関係に…都市の人々の生活は合理性の追求へ → モダニズムも合理性の追求へ

都市化・機械化・資本的近代化

→啓蒙思想に疑問符。多様な表現方法を探し始め、モダニズムの前衛の精神に行き詰っていく。

不統一からなる統一は無理では、と気付く。

→ポストモダニズム的な相対主義や、遠近法主義なども取り入れていく。

4. 合理化に伴うモダニズムの変遷

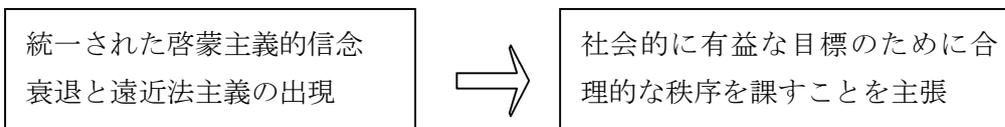
<マックス・ウェバーの言説>

啓蒙思想家→科学の発展と方理性と普遍的人間の自由との間に強力な結びつきを主張
しかし、啓蒙の残したものは、**目的-手段的合理性** だった。

→戦間期のモダニズムははっきりと実証主義の方向へ

※論理実証主義

20世紀前半の哲学史の中で、特に科学哲学において重要な役割を果たした思想。科学経験主義ともいう。経験論に基づいて形而上学を否定し、実験や言語分析により厳正さを求める。



論理実証主義→技術的制御の権化としてあらゆる形態の科学の進歩とともに立ち現れただけでなく、モダニズム建築の実践とも適合

* 「反動的モダニズム」

1930 後半～

国際主義とナショナリズム、普遍主義と階級政治との間に常に潜んでいた緊張が絶対的で不安定な矛盾へと高められた時期

<ナチスドイツとモダニズム>

ナショナリズムにモダニズム的美学原理が取り込まれていった

(ex:アルベルト・シュペーア、ヘルベルト・バイヤー)

ナショナリズム的アイデンティティ→ひとつの神話となる **政治の美学化**

→モダニズム的なプロジェジェクトの悲劇的側面

<モダニズムの終焉>

*機械化による合理性の追究→堅固な空間とパースペクティブ

画一性と直線的なラインの追究へ

モダニズムのアート・デザインが啓蒙的思想を退け、スタイルとして確立していく

モダニズムは、徐々に「伝統主義的」なイデオロギーを緩和する革命的方法としての魅力を喪失していく (高級文化のエリート独占領域化、美学原理領域の実験の行き詰まり)

→1960年代の反体制文化・反モダニズム運動へ

5. 考察

モダニズムは時代を通して様々な変化を遂げてきた。その中でモダニズムであることを決定付けるものとは何であったか。それは、「創造的な破壊」に基づく実験精神、アヴァンギャルドであったのではないだろうか。モダニズム啓蒙家たちは、断絶と崩壊の終わらないプロセスによって、そこに「永遠の真理」を見出そうとしていた。19～20世紀という激動の時代の大波を受けて、モダニズムのまさにその実験的精神はユートピア的であるほどに輝きを放っていたように思う。

しかし、モダニズムの持つ「創造的な破壊」は、プロジェクト遂行の際に実際上のディレンマを抱えていたこともまた事実である。それは、『破壊的なほどに創造性に富んでいる』という側面と、永遠の真理をあらゆる唯一の方法として、自ら永遠の真理を壊す破壊の過程を経なくてはならないという側面との間にあるディレンマである。それを解消できないモダニズムは、悲劇に終わると筆者は述べていた。しかし、モダニズムが終焉した最たる原因は、その不統一からなる結合を放棄し、多様な遠近法と相対主義というポストモダン的な考え方を取り入れていく過程で、その啓蒙的思想を衰退させてしまったことではないか。モダニズムの持つ実験精神が失われた時、そこに残ったものは、合理性を追求した「モダンデザイン」という様式と、その合理性の背後に隠されナチスドイツに悪用されてしまった支配と抑圧の理論であった。

モダニズムは決して完全なものではなく、むしろ負の側面も多く孕んでいる。しかし、ディレンマであることを承知しながらその理想への進歩発展を目指し続ける様は、現在のアヴァンギャルドと言われるものに見出すことはなかなか難しい稀有なもののように思う。ここでは、永遠性や普遍性を求めることがアートの最終地点であるかどうかについては言及することはできない。それでも新しい創造の為に、常に前者を壊し、アクションを起こし続けていくという姿勢は、私たちがモダニズムから学ばなければならないものかもしれない。

<参考文献・参考サイト>

デヴィッド ハーヴェイ『ポストモダニティの条件』青木書店 1999/12

ハル・フォスター『反美学 ポストモダンの諸相』剋草書房 1987/4

現代美術用語集 <http://www.dnp.co.jp/artscape/reference/artwords/>

MODERNISM <http://www.artsmia.org/modernism/>